

# 宮沢賢治記念館通信

発行 〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36

宮沢賢治記念館

☎ (0198) 31-2319  
☎ (0198) 31-2320

(岩手山の山頂から望む御来光 撮影：荒井義雄)

## 気圏オペラの役者になるとき

地方公務員 荒井義雄



賢治さんは、見たことや感じたことを、「そのとおり」に書き残した人であった。

私は、賢治さんが理想郷として称えたイーハトーブ・岩手県(北上市)に、2001年に家族で横浜市から移住してきた。仕事の合間に自給用の無農薬・自然栽培で米作りや野菜作りをしながら、賢治さんがこよなく愛した岩手の山々を登っている。実際に岩手の風土の中で暮らしてみると、賢治さんが詩や童話や文語詩の中に散りばめた言葉の一つ一つが、書かれた「そのと

おり」のままの情景で現れることを実感している。中でも「東岩手火山」や、「山の晨明に関する童話風の構想」の描写は、100年を経た今でも、全く色褪せず輝きを放ち、岩手山や早池峰山に登れば、「そのとおり」の情景を今でも体験することができる。

岩手山には8合目から9合目にかけて山小屋(避難小屋)があり、満天の星空を堪能した後、日の出前の暗闇の中で登り始めると、遮るもののない2,038mの雄大な山頂から、美しい御来光を拝むことができる。「柔かな雲の波だ／あんな大きなうねりなら／月光会社の五千噸の汽船も／動揺を感じはしないだらう」「二十五日の月のあかりに照らされて／薬師火口の外輪山をあるくとき／わたくしは地球の華族である」「私は気圏オペラの

役者です」。賢治さんが書き残した情景を、今でも「そのとおりに」感じることができるのである。この詩が描かれたのは、1922年9月18日とあり、この時期に登れば、気温の逆転や、山の下のように落ちている北斗星、地平線から登るオリオン座や大犬座などの描写が「そのとおりに」実感できる。ただし、「二十五日の月のあかりに照らされて」を実感するには、月齢25日の明け方、つまり旧暦の25日前後に登らなければ体験できない。実際に、1922年9月18日は、旧暦の7月27日だったのである（月齢26.5日）。どうしても9月中旬の旧暦25日の、しかもよく晴れた日の明け方に登らなければ、「そのとおりの」 「気圏オペラの役者」を実感できないことになる。

このため、この条件を満たせそうな巡り合わせを、何年も待ち侘び続けたのであった。そしてついに、2017年9月16日の明け方に岩手山の山頂に登り、運良く天候にも恵まれ、旧暦7月25日の月のあかりを実感するチャンスを得ることができたのである。

前日に8合目の山小屋に泊まり、深夜3時半頃から登り始めた時の満天の星空と天の川、身震いするほどの寒さ、東の空低く登り始めるオリオン座、そして上空には「二十五日の月」が高く輝く。眼下には「柔かな雲の波」がうねるように広がり、東の北上高地の雲平線が膨らむ。

「二十五日の月」は、満月から下弦を過ぎて三日月よりやや大きい位の月齢で、それほど明るくないと想像していたが、岩手山の山頂付近の澄んだ夜空はとても暗く、実際には周囲がはっきりと見渡せるほどに明るかった。「二十五日の月のあかりに照らされて」ヘッドランプなしで登山道を歩くことができ、賢治さんが書き残した「そのとおりの」 「地球の華族」や「気圏オペラの役者」を、ついに、ようやく実感することができたのである。そして、「柔かな雲の波」の「大きなうねり」の彼方に、「月光会社の五千噸の汽船」のように、早池峰山が浮かんでいる。その姿は、海上を進むクルーザーのようにとっても美しく、雲海の広がった日の明け方の岩手山の山頂からしか、見ることができない光景である。

これまでに岩手山に登ったのは24回。そのうち、山小屋に泊まったのは11回。しかし、天気予報を見て晴れそうな日を狙って登っても、山頂だけガスや強風の大荒れの気象に見舞われることも多々

あり、御来光を拝めたのは、わずか5回。しかも9月中旬の旧暦の25日となると、「二十五日の月のあかりに照らされて」「地球の華族」や「気圏オペラの役者」になることができるのは、もうほとんど困難となる。この100年の間に、これを実現できた方は、はたして何人いたのだろうか。岩手山は、2024年10月から火山活動の活発化のために登山禁止となっているが、幸い今年の7月からは、再び山頂まで登れるようになるとのこと。この先も毎年諦めずに、「気圏オペラの役者」になるために、賢治さんを想いながら登り続けていきたいと思う。



## ケハシキタビノナカニシテ

山尾三省記念会代表 山尾 春美



山形県置賜地方に生まれ育った私は東京・横浜を経て、36年前に屋久島に移住した。それ以来ずっと、島の海辺から4キロほど山に入った白川山しらこやまという集落に住んでいる。ここは少し変わった所で、高度経済成長期に

本当の暮らしがしたいと移住した2家族を中心に、同じような考えの人たちが少しずつ集まってできた移住者の集落だ。今は13世帯20人ほどが住んでいる。以前は50人以上が住んでいたが、子ども達が巣立って高齢化し、人口も減った。具体的に他と変わっているところを1つだけ挙げるとすると、21世紀になった今も、どの家も薪を焚いて五右衛門風呂を沸かしていることだろう。ガスと併用している家もあるが、私は36年間ずっと薪で五右衛門風呂を焚いている。脱成長の村と言えるかもし

れない。

そんな私が2年前、中学時代の同級生だった本間哲朗君に誘われて「米澤ポランの廣場」の会員になった。本間君は長年地元で主催していた賢治の読書会に区切りを付け、遠隔会員によるレポート提出の形の新しい読書会を始めたのだ。その前年、宮沢賢治学会イーハトーブセンター功労賞を受賞した本間君のレポートが届き、そこに「精神歌」のことが書いてあった。それに触発されて、こんな文章を書いた。

『久しぶりに元浦浜に行ってみた。家から五キロほど離れた所にある元浦浜は小さいが、道路端に車を止めてすぐ浜に下りることができるのがいい。しかも海の青さが島の中で際立って美しい所だ。車を止めて浜を見ると、なんとたくさんの流木が打ち上がっていた。8月初旬の台風6号が運んできたものだ。長く居座った6号には随分うんざりさせられたけれど、こんな恵みもある。流木は風呂の火を焚く薪になる。夕方だから、なんとなく気は急ぐが、ゆっくりしゃがんでは拾い、しゃがんでは拾う。両腕いっぱいになったら車まで行って積み込む。それを三回ぐらい繰り返したら、もう息が切れてきた。砂浜は歩きにくいのだ。終わりがけのハマナタマメの濃いピンク色の花やハマゴウの青紫の花を眺めて息を調えた。その時、ふっと「裸足になろう」と思った。「そうだ。裸足だ。裸足だ。」とビーチサンダルを脱ぐと足はいきなり軽くなった。少し湿った砂の感触が心地良く、傾きかけた陽射しもちょうど良い。気持ちがいいなあと思っていたら、昨晚たまたま聴いた「精神歌」の歌詞が口を付いた。「ケハシキタビノ ナカニシテ ワレラヒカリノミチヲフム ワレラヒカリノ ミチヲフム」…光の道を踏む…光の道を踏むのはやっぱり裸足がいいんじゃないか。心は厳かに、裸足の足は弾み出しそうだ。そして、しばらく裸足のまま海を眺め、その一節を繰り返し口ずさんだ。四番まである歌詞の最後しか思い出せないから、家に帰ったら、もう一度聴いてみよう。そして、それから風呂を焚こうと思って車に戻った。』

あれから月日は流れたが、折に触れて口ずさむ「精神歌」に今も胸は震える。誰にとっても人生は一筋縄ではいかないものだと思うが、私の36年間の島暮らしもなかなか厳しいものだった。とは言え、その厳しさゆえに感じる幸せがあり、それこそが

光の道でもあったと思う。

「わたしたちは、氷砂糖をほしくらゐもたないでも、きれいにすきとほった風を食べ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。」

と賢治さんが書いたように、私もすきとおった風や美しい朝の日光を至福の食べ物として暮らしてきたし、これからも暮らしていきたいと思っている。

さて、この間、賢治さんを身近に感じるできごとがあった。私たちの集落では、毎年、年末に皆で餅つきをする。火を焚き、餅米を蒸して、杵と臼で搗く餅つきだ。すっかり珍しくなったそんな餅つきがやりたくて、島中から人々がやってくる。1日かけて、30臼40臼と搗く。私は毎年よもぎ餅を搗いてもらう。餅つきの前日によもぎを摘み、あんこを練る。昨年末も近くの空き地によもぎを摘んだが、摘んでいる最中に賢治さんの「狼森と策森、盗森」を思い出した。そうだったと思い、大声で「よもぎを摘んでもいいかあ」と訊いてみた。そうしたらその時、風がザザーッと吹き、サーッとよもぎの葉を揺らしていった。葉裏の銀色が美しくそよいだのだ。まるで「いいぞお」と言っているようだった。私は思わず「ありがとう」と叫んだ。できあがったよもぎ餅は1年間のお礼の気持ちとともに、皆に食べてもらい、もちろん、よもぎを摘んだ空き地の石の上にも置いた。次の日、よもぎ餅はちゃんと無くなっていった。私はまだ賢治さんを読み始めたばかりだから、これから賢治さんの世界を読み歩くことを楽しみにしている。そして、賢治さんと呼応しつつ、前近代的な自分達の暮らしをさらに深めたいと思っている。遅れていると思われていた暮らしがいつのまにか一番新しい暮らしになっているかもしれない…そんな時代に突入していると思う。



## 北極星に宙路を取れ

会社員（農業系）野澤峻大



私という存在において、宮沢賢治その人はもうどうしようもなく眩しく輝く北極星の様な存在なのです。

東京は二十数年余りを過ごし、所狭しと人々がいき交う中で、私はついには昼も夜も無くなっ

てしまいました。

子どもの頃から、他人を中心に物事を考えていた私は、日々の体験から水を得る内に、利他主義的な思考に背中を預けるようになりました。2000年以降に生まれた私のこの白濁した青い此界（しい）には、圧倒的に個人主義と資本主義がすでに確固たる地位を築いておりました。

私は「他が喜んでくれること」を最善とする我（われ）と我（が）を潰さないために、個人を尊重する世俗との間に揺さぶられ、暗い影を落としていたのです。そんな最中、家の近くの古本屋で一冊の絵本を手に取りました。

「竜のはなし——宮沢賢治」

この絵本を開き、一通り読みました所、私は誰に聞こえるわけでもない微かな声で、「ここにいた。」と囁いたことを今でも記憶しております。

それからはもう、嵐のごとく賢治さんの作品を読み、私は夜を取り戻しました。とりわけ、「農民芸術概論綱要」、「青森挽歌」、「虔十公園林」、そして「雨ニモマケズ」、これらの作品には夢中でした。

小学校の国語では「雨ニモマケズ」を、中学校の国語では「オツベルと象」を、高校の現代文では「よだかの星」を題材にして学びを得ました。当時さほど気にせず、有象無象の日本作家の一人と見なしていたのは何故だったのか、今になって考えますが、わたしにもよくわかりません。

それでも「竜のはなし」を手にとってからは早く、すぐに花巻を訪れました。青森や北海道は礼文島にも足を運びました（本当は樺太まで行きたかったのですが）。そうして賢治さんの「本当の道」を追って、ついには花巻市に移り住み、石鳥谷町で農業をすところまで来てしまったのです。東京は世田谷育ちの私には、本当に、農業は忙し

く仕事も辛いと感じました。生命と向き合う事は体力勝負な所も随分多く、自分の時間など一握です。

しかし面白い事に、私も賢治さん同様、心の底から「疲れた」と考えたことは、誓ってただの一度も無いのです。

そのうち私は、昼を取り戻しました。樫の木のように堅かった私の心は、樺の木の様に柔らかくなったのです。

では、話を未来へ進めましょう。

私達は、活発に動き続ける小さな電子の様なものであり、電子が活動している間は、回路（世界と読み取っても良い）は止まる事はありません。私達が、ぶつかり、瞬くためには、また進んで来る電子が有る事を忘れてはなりません。やがてその光は、私達の体内に蓄積され、新しい光を形成するのです。

ですから、私は、私達が交流する回路（交流電磁誘導の様なもの）の中で、新しくぶつかる電子達と出会う事を蔑ろにすることは、どうにもできないのです。

何故ならば、各々に“思い”があるのです。

私はそれらの光の思いをゆっくりと、一々屈みながら拾い、集め、全てボロ布で拵えたジャケットのポケットに大切にしまってきたのです。

ああ、私が心の奥底で墨守し続けてきた「人の為に、自ら進んで行動できる人間」という、周りに理解してもらえなかった思考。それを共に、およそ百年前の、日本を代表する人物が一緒に進んでくださると思うと、透明で強烈な追い風が私の肩を叩き、過ぎ去り、僅かな轍を示してくださるのです。

それを思うにして、今あなたの目の前にして、これらの私の愛すべき言葉たちが映ることを大変嬉しく思います。

あなたの血肉となるその野菜を、肉を、どこへでも運んでくれる自動車を、毎日気にかけてくれるその人を、



決して侮り、軽んじてはいけないと私は強く思うのです。現代において、多くの事象は自分自身で全て作り上げることは不可能であります。ですから、私は他を尊ぶ志が、人生において最重要項目の一つであると信じるのです。

「すべてがわたくしの中のみんなであるやうにみんなのおおののなかのすべてですから」

私は主義や信仰に限らず、平和と幸福への近道はこれに尽き、収束していると考えています。ですから、私は、これらの気づきを与えて下さった宮沢賢治を、私の生涯の道標とし、最後にこう言いたいのです。

この身に満ちる幾多の志が永久に、輝き続けることを願って、北極星に宙路をとれ。

## 結い — 賢治が繋ぐ心と心 —

### 一等星

ラジオパーソナリティ 藤原 詳



私にとっての“表現”とは、学生の頃から人生の一部です。世の中には数多の“表現者”が存在し、僭越ながら私もその一人であり続けたいと思っています。

数多の表現方法がある中で、私は“声の表現”というジャンルに属するのだと思います。

“声の表現”というのも様々で「声優」や「歌手」、「ラジオ」はもちろんのこと「俳優」や「落語家」なども“声”を必要とします。

そんな、数多ある声表現の中で恐らくマイナーとなっているのが「朗読」です。

私はこの「朗読」に長らく触れてきていて、青春も一ページだけでは飽き足らず、数ページにわたり彩ってもらったと思います。本当に誰にも渡したくない思い出ばかりです。

ただ、そんな思い出たちの中で“宮沢賢治作品”というのは、息が浅くなるほどに私の胸を焦がし続ける一等星として存在しています。

私は数年前、「銀河鉄道の夜」の朗読をする機会に恵まれました。

オンラインではあったものの、花巻市民として宮沢賢治作品を人前で表現できる喜びは何にも代えがたく、今こそ花巻小学校・花巻中学校・花巻農業高校卒業生としての力を発揮する時だ！と息巻いていたほどでした。

もう「すべての賢治は我が手の中にあり」と言わんばかりの心持ちで練習を始めた私は、見事にその鼻を銀河鉄道に轢かれる事となります。

何度も何度も何度も、いつまでもいつまでも読み込んでも内容を理解しきれないのです。

朗読というものは言わば、“一人で映画を作るようなものだ”と恩師から教わりました。

演者、演出、カメラワーク、BGMすべてを脳内にて一人でこなし、必要なら絵コンテも描き、明確なビジョンをもったうえでステージに立つのだと。

無理でした。

なんですか。「億万の蛍鳥賊の火を一ぺんに化石させて、そら中に沈めたといふ工合」って。

(※他にも例をあげたいですが、終わらないので割愛します。)



いや、言わんとしている事はわかります。想像もできます。それはもう綺麗なんでしょう。

しかし、いくら考えても自分の頭に浮かんでくるものが“賢治さんが見た景色”とは到底思えないのです。

青い光を“螢烏賊の火”と言い、夜を“濃い銅青”と言い、地図は黒曜石で出来ていて、ガラスよりも水素よりも透き通っている水があるこの世ともわからない『銀河』なのです。

私の全経験、想像力を動員し知恵熱を出しそうなほど考えても納得する事はできませんでした。

その後、本番を迎え、魅了されながらも悔しさの業火に胸を焦がされ続ける現在の私ができあがります。

正直鳥辭がましい話なのだと思います。

けれど、私はいつか、あの一等星までたどり着いてみたいと思ってやまないのです。

## 蛇紋岩のそばみちに

物語作家 野口美音

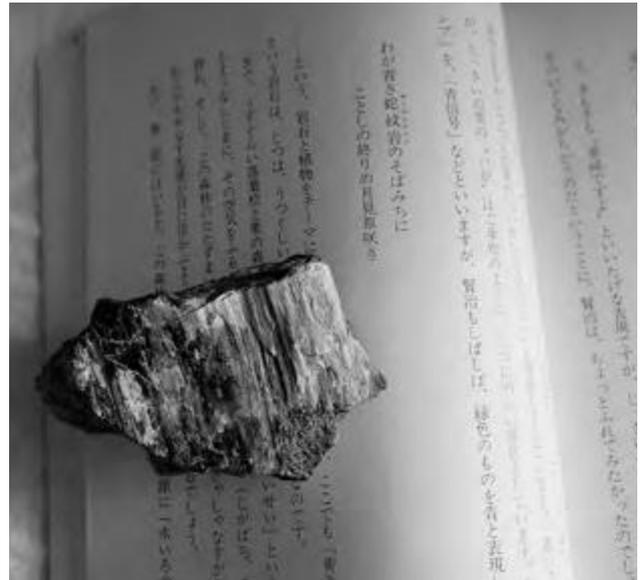


全天88星座の物語を書くという星めぐりの旅を終えたら行く心に決めていた。宮沢賢治さんに会いに花巻へ。物語を書きはじめ10年以上経つ。終わりの見えない旅の途中、一冊の本（「宮沢賢治と植物の世界」宮城一男/高村毅一著）を通して出会ったその人は岩手県出身だった。彼は本を開きながら胡桃の化石の話をしてくれた。しんとしていた心が音を立てて動いた。星座の物語はまだ半分も満たない未完のまま、動く心に従って花巻を訪れたのは一昨年のこと。

「早池峰と賢治の展示館」の館長さんは無類の石好きとみる。どこかしこに石が並んでいた。その中に、話に聞いていた胡桃の化石もあった。川が合流するこの辺りではほとんどの種類の石が拾えるという。石が好き、それだけで垣根を越えてしまうから不思議。石の話から始まり、「風の又三郎」のモリブデン鉱石など賢治作品と早池峰の関わりを知る。そして賢治離れしている学生に向けて農作業が体験できるような“賢治の学校”をつくりたいという話を聞くころには、その知識と先見の

明を持つ眼差しにすっかり魅了され、時間があっという間に過ぎていった。会話の傍らにも石があり、聞けばそれは早池峰山で採取したという蛇紋岩だった。

わが青き蛇紋岩のそばみちに  
ことしの終りの月見草咲き。



あの本にあった賢治さんの短歌。蛇紋岩を「青き」と表現しているが、“じつはうつくしい緑色の岩肌をほこる種類のもの”と書かれている。持って帰っていいと言ってくださったそれも緑と黒の渋い色をしていた。「賢治作品は読むだけではなくて、描かれた風景や自然物などその実物を見てほしい」とお話していた館長さんは、「早池峰賢治の会」会長、浅沼利一郎さんだった。次に会うときには一緒に石を拾いましょうと約束し、帰るバスの中で、もっと早くここに来て浅沼さんとお話していたら、と涙が止まらなかった。いまからでも遅くはないという希望の光がその一か月後、浅沼さんの死を告げる連絡により消えてしまい、その意味を見出せないままそのままにしている。花巻に行く前と行った後と、いまは目に見える変化がなくても、浅沼さんとの出会いがひとつの星となり、星と星を繋いでいつか大きな星座を描く日が来たときには、見てもらえるだろうか。巡り合わせてくれた宮沢賢治さんに。どうか蛇紋岩のそばみちに、並ぶおふたりの姿がありますように。全天88星座の物語、残り63星座。星めぐりの旅は終わりそうにない。

●宮沢賢治記念館特別展開催記念行事  
「童話 よだかの星」朗読会



令和7年11月2日(日)、「童話 よだかの星」の朗読会を開催しました。語り手は、IBC岩手放送アナウンサーの、神山浩樹さんと甲斐谷望さんです。約90名のお客様にお集まりいただき、神山さんと甲斐谷さんの落ち着いた力強い朗読を鑑賞しました。後半のフリートークでは、お二人が朗読をするにあたって調べたことや工夫したことなどを話していただきました。

■「賢治の世界」セミナー2025

15年目となる「賢治の世界」セミナーを、花巻市内の小中学校、高校を会場に開催しました。(市内17校18会場1,503名《昨年実績:18校19会場1,651名》)。



「ざしきぼっこの会」の皆さまは、「風の又三郎」の朗読を花巻の方言で聴かせてくださいました。方言のセリフについては意味が分かったという子どもたちの声もあり、今後さらに幅広く宮沢賢治作品に興味を持つきっかけとなったことと思います。

■「賢治の世界」ワークショップ2025

10/25(土) 賢治さんと樹木と山―秋の胡四王山散策

4名の参加がありました。環境インストラクターの高橋修さんによる胡四王山散策は毎年人気のワークショップでしたが、岩手県内で熊による人身被害や目撃情報が発生していたこともあり、今回はイーハトーブ館で講話となりました。詩「岩手軽便鉄道の一ヶ月」に登場する2種のクルミの違いを胡四王山で採取した枝や、胡四王山や豊沢湖周辺(童話「なめとこ山の熊」の舞台)の動植物の様子を映像や写真や地図を見ながら解説して頂きました。人間の営みによって、80年前・40年前・現在と景観や植生が大きく変遷してきた事や、異常気象に対する動植物の自衛現象など、参加者の方たちは子供の頃の体験等を思い出しながら興味深く聞き入っていました。



11/16(日) バスで巡る賢治ゆかりの経埋ムベキ山

22名の参加がありました。滝田恒男さんを講師に迎え、経埋ムベキ山のうち北上市・花巻市にある胡四王山・観音山・旧天王山・物見崎・飯豊森・八方山・草井山(経埋ムベキ山に入れて取り消した)・松倉山・江釣子森山・堂ヶ沢山・大森山・権現堂山をバスの車窓より見学しました。

滝田さんは「経埋ムベキ山」全32座を訪ねてスケッチし、絵と随筆にまとめた『風の巡礼 経埋ムベキ山』を出版する等、長年に渡って賢治をテーマに絵を描き活躍されていて、豊富な経験と知識を基に山の絵と実際の山を見比べながらスケッチした当時の思い出を話してくださいました。



## 《特別展》のお知らせ

### ◆「村童スケッチ」



**期間**：令和8年2月21日(土)～5月31日(日)

**会場**：特別展示室

賢治の童話には、作品の形態によって自らで分類を試みたと考えられる作品がいくつかあります。それらは「寓話集中」、「花鳥童話集」、「西域異聞三部作」等といったものがあり、草稿、特に表紙題名とされる用紙に書き込まれています。その中の分類の一つに「村童スケッチ」とされる作品群があり、字のとおり村に暮らす児童を対象に描かれたもので「十月の末」、「谷」といった童話があげられます。また、「風の又三郎」に転用される「風野又三郎」、「種山ヶ原」、「さいかち淵」も「村童スケッチ」の一部といえます。これらの作品に焦点をあて、賢治が実際に見て描いた「村童」の姿を紹介していきます。

### 直筆稿の公開

①令和8年3月20日(金・祝)～3月29日(日)

②令和8年4月29日(水・祝)～5月10日(日)

※5月7日(木)は休館日

※資料入れ替えのため特別展示室のみ閉室する日がございます。詳細は花巻市ホームページをご覧ください。

### ◆「猫とねずみのはなし」

**会期**：令和8年6月6日(土)～9月27日(日)

**会場**：特別展示室

宮沢賢治の童話には、人を動物に置き換えたお話がたくさんあります。

その中でも猫やねずみは「ツェ」ねずみ、「クンねずみ」、「鳥箱先生とフウねずみ」といったねずみ三部作や、「猫の事務所」、「セロ弾きのゴーシュ」といったように、様々な作品を楽しく展開させる重要な役割として登場します。

生活に身近な動物である猫やねずみをどのようにみていたのか、賢治の視点にも着目しながら作品を紹介していきます。

令和8年4月1日(水)から

開館時間と休館日が変わります

休館日：毎週火曜日

(祝日と重なったときはその次の平日)

12月28日から1月3日

※臨時で開館する日程もございます。詳しくは当館までお問い合わせください。

開館時間：午前9時から午後4時30分



2026年は宮沢賢治生誕130年です。イベントなどの情報は、花巻市ホームページをご覧ください。

### \* 編集後記 \*

昨年の6月、私と同じように宮沢賢治がきっかけで花巻に移住したという方にお会いしました。今回寄稿をしてくださった野澤様です。職場の同僚の方が私と共通の知り合いで、「絶対会ったほうがいい」と推してくださったとのことでした。宮沢賢治のファン同士というのは不思議だなと思うのですが、初対面でもまるで久しぶりにあった親戚のような安心感があります。これって他の作家さんでもあることなののでしょうか。野澤様は作品を読むだけでなく、そこから自分の人生観や生き方につなげようとしている姿勢がとても印象的でした。今後も花巻での暮らしを楽しみながら、色々なことを吸収してほしいです。(Y.S)